



IRCN

国際交流情報

International Relationship Committee News

第13号

2016

大学美術教育学会
国際交流委員会
国際交流情報誌

2016 年秋季号

特集：国際社会で取り組まれている美術・図工科教育
2017 年韓国 InSEA 参加・発表登録とアクセスについて

目次 特集 1：国際社会で取り組まれている美術・図工科教育

第 I 部：国際社会で取り組まれている美術・図工科教育

アメリカ合衆国オレゴン州の一小学校での
図工教育の取り組み

小澤基弘

今年 2 月、埼玉大学のアメリカでの提携校であるオレゴン州西オレゴン大学を…訪問しました。同校と埼玉大学教育学部は、特に芸術系分野の教員及び学生交流をこれまで継続してきました。

今回の訪問では、当該大学近郊にある小学校（Candalaria Elementary School）での図工授業を見学する機会を得ました。…／私たちが見学した授業は 4 年生の版画の授業でした。…授業に PTA ボランティアが複数参加して、教師と協力し合って授業を進めているという授業形態でした。見学した授業は、スチレンボードに釘で絵を描きそこにインクを乗せて刷り上げるという単純な内容でしたが、この授業はアメリカの「ポップアート」を理解するという大前提があり、その前提講義をなんと西オレゴン大学の美術史の教員が行っていました。…



動物の写真を参考にしながら制作をしている子どもたち

フィンランドの美術教育を支える地域アートスクール
～HIPAROT 子ども芸術祭の取材から～

甲田 小知代

2006 年よりフィンランドの美術教育について調査・研究を行って…訪問も 10 回目を数える。…／今回は、…ハメーンリンナ市の文化施設…の美術教育の一端について報告する。

…首都ヘルシンキから北へ約 100km、人口約 6 万人の地方都市ハメーンリンナ。そこにある文化施設「アルクス」は市が運営し、国からの助成も受けている。…／職員は美術教師の資格を持つものだけでなく、「カルチャープロデューサー」の資格を持つ者が指導を行っており、…子どもたちの指導だけでなく、小学校の担任に対しての美術教育の研修や美術専門学校の授業の一環として学生を受け入れるなど、公教育における美術教育を支える役割を果たしている。／…

取材日は…芸術祭の初日。…／屋内の施設では、立体作品の制作を中心に活動が行われていた。…日本のような教材キットの使用例は私の取材範囲の中では皆無で…アクリル絵の具や接着剤などの必要なものは購入されていたが、その他の材料については、不要になった布や自然の材料等が使われていた。…／ワークショップに参加していた女の子にインタビューしたところ、「昨年、初めて参加し、とても楽しかったので、また、今年も参加した」と答えてくれた。



完成した帽子を被り記念撮影

駆け足で見たドイツの教育事情 富安敬二

2014年9月…、デュッセルドルフ市とその近郊の学校で授業観察を行なった。…特別支援教育、発達心理学の観点から考慮しつつ造形教育の役割を確認するという名目で、…美術・図画工作教育だけの調査ではない。…ドイツの5つの学校、移動日をはさみ後半の3日間でオランダの4つの美術館見学という強行軍だった…。

…5校は、現地の知人の紹介で基礎学校、ギムナジウム、特別学校2校と、日本から直接アクセスしたシュタイナー学校である。…ドイツの複線型学校制度には以前から関心があり、基礎学校の後、3分岐される上級学校に進む際に、わずか10歳でどのような基準で将来の選択ができるのかを探るため、最初に基礎学校（GGG Buchenschule）を訪れた。／…／…／…

シュタイナー学校の…授業を紹介すると、オイリュトミーは素晴らしかった。教室は別の建物の多目的室で行なわれた。ピアノの伴奏に合わせ、約20名の高校生が図形をトレースするように動くのだが、それは体操というより踊りに近く、伴奏曲の抑揚に合わせて強弱をつけたりして感情を表していた。…／…



シュタイナー学校、オイリュトミーの授業

ソウル特別市中堅教員にみる図工科授業の 構想力と驚き 鈴木幹雄

…韓国ソウル市浦二初等学校（小学校）を訪ねた（2016.3.15,17）。同校は、権（クオン）五勲校長先生が校長を務めている小学校で、ソウル文教地区近くに位置する。／…／今回は、2016年3月17日に同小学校を訪問後、権先生推薦の図画工作の担当をされている、イム・ジョンファ（林正和）先生に授業を特別に依頼してもらえた。…イム先生が見せてくれた小学校4年生の図画工作の授業は、わずか2時間続き1コマの授業であった…にもかかわらず、授業の構築力に驚嘆する内容であった…。

まず先生は、生徒たちに「私の考える家の様子」を白画用紙とはさみで表現させ…／…次に…子どもたちが「住みたい家の様子」をイメージさせた。…／…同時に…世界の奇想天外で「魅力的な住居」を大型…ディスプレイを使って子どもたちに見せた…。／第2局面を経て、先生は子どもたちに、…「住まい」への様々な夢を「象徴化」させる方法で…表現させた。…

…筆者も含め、…「経済的に難しさを抱える」と言われる隣国の首都、ソウル特別市で、中堅教員に表現教育の授業構築力・構想力が育って来ている現実に感心した1日であった。



先生が見せた世界の奇想天外で「魅力的な住居」

第Ⅱ部：国際社会で取り組まれている芸術文化教育・鑑賞教育

ルーブル-ランスにみるフランスの芸術文化教育

結城孝雄

2012年に開館したルーブル美術館 ランス (Lens) 別館は、今日的なフランスの芸術文化教育を象徴する施設…。2016年2月に訪問した時の様子からレポートします。

小さなランス駅…からは美術館までシャトルバスが運行されていますが、遊歩道も整備されています。住宅地や幹線道路に沿って、巨大なサッカースタジアムを見ながら、15分程度で丘陵に佇むルーブル-ランスに到着します。／…

…展示フロアは、巨大な体育館をおもわせる一つの空間になっています。…人類の文化遺産を年代順に配置して、その移り変わりを一目瞭然にしていることになります。美術館というより、「西洋文化遺産博物館」と言ってもいいかも。人類が美しさの価値をどの様に表現してきたかを体現しているかの様に思えました。…観覧者は、横に進めば同時代を比較しながら、縦に進めば同領域を、常に比べながら、価値ある遺産としての文化と美の基準を思考しながら、鑑賞できるのです。この美術館の役割と効果がどのようなものか、今後…に関心を持ちます。…／…



ルーブル美術館 ランス別館の展示フロア

海外の美術館を利用したオンラインによる国際授業の 開発—フィラデルフィア美術館との連携を通して—

中村和世

インターネットの普及によって、海外の美術館等がホームページから提供する美術作品の画像や教材を用いて授業ができる時代になった。世界規模でグローバル化が急速に進む中、…教師には、自国と合わせて他国のさまざまな美術文化にも目を向け、多文化的な環境に生きる子どもたちのために、多種多様な美術文化を学習材とした授業づくりの力が必要となる。

私が大学で担当しているオムニバスの…授業「学習方法開発特講」では、…初年度は「ゴッホを中心とする後期印象派の絵画」、昨年度は「東洋の美術（インド、中国、日本）」をテーマにした授業を行った。授業では、国際テレビ会議システムを使用し、オーレアリ先生と対面しながら、学校向けプログラムを紹介していただいたり、美術館所蔵の作品をスクリーンに映し出してディスカッションを行ったりしている。

受講生からは、「…臨場感があって面白かった」…などの声を聞いている。



リンダ・オーレアリ先生

特集2：2017年韓国 INSEA 参加・発表登録とアクセスについて

編集後記

第 I 部：国際社会で取り組まれている美術・図工科教育

アメリカ合衆国オレゴン州の一小学校での図工教育の取り組み

小澤基弘

今年 2 月、埼玉大学のアメリカでの提携校であるオレゴン州西オレゴン大学を久しぶりに訪問しました。同校と埼玉大学教育学部は、特に芸術系分野の教員及び学生交流をこれまで継続してきました。

今回の訪問では、当該大学近郊にある小学校 (Candalaria Elementary School) での図工授業を見学する機会を得ました。アメリカの小学校ではセキュリティの関係で、授業の様子を見学することや、それを写真撮影したりビデオで記録することはかなり難しい状況です。今回訪問した小学校でも図工室は一旦授業が始まったら部屋にロックがかかり、授業途中での退出や入室は禁じられていました。トイレは教室内にありました。そうしたなかで、今回見学の機会を得、また授業の様子の撮影許可も得ることができました。

私たちが見学した授業は 4 年生の版画の授業でした。まず驚いたことは、授業に PTA ボランティアが複数参加して、教師と協力し合って授業を進めているという授業形態でした。見学した授業は、スチレンボードに釘で絵を描きそこにインクを乗せて刷り上げるといった単純な内容でしたが、この授業はアメリカの「ポップアート」を理解するという大前提があり、その前提講義をなんと西オレゴン大学の美術史の教員が行っていました。その先生の娘さんがこの小学校に通っており、彼女自身が PTA だったわけです。

彼女は小学校 4 年生に分かりやすいように、丁寧に、そしてウォーホール等の作品図版を有効に使いながら、ポップアートを説明していました。子どもたちも静かに講師の話に聞き入っていました。制作中もボランティアが子どもたちの活動を常にサポート

☞各子どもたちの活動の様子を随時スクリーンで紹介し相互に共有している



PTA で西オレゴン大学教員による前提講義の様子



動物の写真を参考にしながら制作をしている子どもたち



しており、担任の教師は全体を常に眺め観察し、適切なきにそれぞれの子どもたちを指導していました。

ボランティアと教師との連携が実に有機的・効果的であり、そのおかげで子どもたちの作品はみるみる出来上がっていきました。こうしたケースは日本では殆どみられません。PTA と教師との授業レベルでの連携が、日本の小学校でも促進されるべきと強く感じた次第です。また PTA で美術の専門家である方々は、おそらく各校にはいるはずです。PTA との連携、その人材活用もまた、今後の日本の義務教育に導入していく必要があると感じました。

(埼玉大学 教授)



刷り上がった作品

☞ 刷り場が混み合っているので、待機している間に子どもたちは別の課題に取り組んでいた



フィンランドの美術教育を支える地域アートスクール ～ HIPAROT 子ども芸術祭の取材から～

甲田 小知代

2006年よりフィンランドの美術教育について調査・研究を行っており、同国への訪問も10回目を数える。

フィンランドには、日本のような学習塾のようなものが存在せず、多くの子どもたちは放課後に様々な習い事を行っている。それらはスポーツや芸術など多岐に渡り、公私に関わらず様々な施設が充実しているのが特筆すべき点であり、以前、本誌第6号で首都ヘルシンキの「ANNANTALO 芸術センター」の活動について、報告させていただいた。

今回は、2014年7月に訪問したフィンランドの



図1：「物語の絵画を描く」

地方都市「ハメーンリンナ市」の文化施設への取材を元にフィンランドの美術教育の一端について報告する。

*

フィンランドの首都ヘルシンキから北へ約100km、人口約6万人の地方都市ハメーンリンナ。そこにある文化施設「アルクス」は市が運営し、国からの助成も受けている。イベント等では国からの支援が4万ユーロ、企業から1万ユーロの協賛金を得ている。

施設では5歳～20歳の幅広い年齢層の人が在籍し、様々な造形活動を楽しんでいる。毎年、春に募集を行い、秋から活動を開始している。ほとんどの人が10歳頃までに入校するが、6～7歳くらいで入校する人が多い。試験は行われずランダムに決定しており、希望する人の約9割程度の合格率ということ。できるだけ何年も続けて申し込んでいる人を優先して入校させるとのことである。

職員は美術教師の資格を持つものだけでなく、「カルチャープロデューサー」の資格を持つ者が指導を行っており、施設に通う子どもたちの指導だけでなく、小学校の担任に対しての美術教育の研修や美術専門学校の授業の一環として学生を受け入れるなど、公教育における美術教育を支える役割を果たしている。

「HIPAROT 子ども芸術祭」は、同校が4日間の日程で開催する親子向けの芸術祭であり、例年、子どもたちの夏休み期間に合わせて開催されている。ちなみにフィンランドの学校は約2ヶ月半の夏休みがあるため、その期間に同様の芸術祭や1週間単位の造形ワークショップなどが各地で盛んに行われている。

取材日は4日間の芸術祭の初日。その年のテーマは「ゲームと遊び」。そのテーマを受け、様々なワークショップが展開されていた。ワークショップへの参加は事前に参加費（1日ごと）を支払ってからリストバンドを受け取り、それが1日の参加証となる。ワークショップによっ



図2：建築会社から譲り受けた壁紙見本



図3：『完成した帽子を被り記念撮影』



図4：木材によるゲーム作り



図5：親子で制作を楽しむ

て事前予約できるものもあるが、当日、会場で参加可能なものもある。親子で楽しむ活動を趣旨としているため、それぞれのワークショップでは、子どもだけでなく、親も一緒に楽しむ姿が見られた（図4、図5参照）。

屋内の施設では、立体作品の制作を中心に活動が行われていた。フィンランドの造形活動は自然や身近にある材料を使用することが多い。これまでフィンランドの学校等の取材を行ってきたが、日本のような教材キットの使用例は私の取材範囲の中では皆無である。今回もアクリル絵の具や接着剤などの必要なものは購入されていたが、その他の材料については、不要になった布や自然の材料等が使われていた。

このイベントの指導者は施設の職員や地域の美術専門学校の学生によるボランティア（専門学校での授業として単位認定される）、招聘アーティストや絵本作家など多岐にわたる。

乳幼児向けのワークショップでは、絵本の作品を元に制作するというものがいくつか設定されており、当日は絵本作家本人が読み聞かせを行うというイベントが行われていた。物語のイメージを描くもの（図1）や端布や発泡スチロール球、棒等を使って登場人物の人形を創るというもの、手紙を書いてガラスの瓶に入れ、湖に浮かべるといふもの等があり、幼い子どもが親子で容易に造形活動を楽しむ姿が見られた。

ワークショップに参加していた女の子にインタビューしたところ、「昨年、初めて参加し、とても楽しかったので、また、今年も参加した」と答えてくれた。

また、小学生以上向けのワークショップでは、「帽子を作る」というものや「大きな鳥の羽を創る」というもの、「木を使ってゲームを創る」というものなど、主に立体作品や身につけるものを創るようなワークショップが複数実施されていた。『帽子を作るワークショップ』では、建築会社から壁紙見本が冊子になったもの（図2）を譲りうけたものを使用して、制作を行っていた。本物の壁紙のため材質もしっかりしており、作品の完成度を高めていた（図3）。

*

屋外ではコンサート会場が設置しており、多くの親子がコンサートを楽しむ姿が見られた（図6）。

フィンランドも少子化のため子どもの数が減っているが、高福祉の政策により、子育て支援の制度が充実している。男女平等の考えが浸透していることから父親の育児参画が当たり前のこととなっており、会場には多くの父親が参加しており、福祉に手厚いフィンランドの様子を垣間見ることができた。

このフェスティバル参加者は、ワークショップで様々な造形活動に興味を持ち、同施設に入校を希望してくる人が多いそうである。一般的にフィンランドでは、アートスクールへの入学者の割合は、女子の方が高い傾向があるが、同施設は他校よりは男子が多めということである。この芸術祭は1957年から始まり歴史が長いため、親子二代や三代に渡って参加している人も少なくなく、長年に渡って地域の造形活動を支えてきた実績がうかがえる。



図6：屋外コンサートを楽しむ親子

＊

最後に、これまでフィンランドの国内の幼稚園から大学、公私アートスクールや文化施設をいくつか取材を行ってきたが、トップに立つ人や指導者のほとんど女性であることに驚かされる。首相が女性だった時代もあるが、国内では女性の活躍がめざましい。男女の分け隔てなく誰もが活躍できる社会の中で、安心して暮らせる充実した社会制度と自然との共存に価値を見いだす国民性が、芸術教育を充実させる素地につながっているのではないかと考えている。今後も同国の美術教育について取材を継続していきたいと考えている。

(新潟市立潟東中学校 教諭)

駆け足で見たドイツの教育事情

富安敬二

2014年9月8日から10日にかけて、デュッセルドルフ市とその近郊の学校で授業観察を行なった。同行者との共同研究により特別支援教育、発達心理学の観点を考慮しつつ造形教育の役割を確認するという名目で、必ずしも美術・図画工作教育だけの調査ではない。調査期間は7日間で、上記した3日でドイツの5つの学校、移動日をはさみ後半の3日間でオランダの4つの美術館見学という強行軍だったため、いずれも駆け足になったことは否めない。

その5校は、現地の知人の紹介で基礎学校、ギムナジウム、特別学校2校と、日本から直接アクセスしたシュタイナー学校である。ドイツ連邦共和国は州によって夏休みが異なるが、同市があるノルトライン＝ヴェストファーレン州は8月19日で終了していたため、始業開始から4週目に入る時期の訪問であった。

＊

ドイツの複線型学校制度には以前から関心があり、基礎学校の後、3分岐される上級学校に進む際に、わずか10歳でどのような基準で将来の選択ができるのかを探るため、最初に基礎学校(GGS Buchenschule)を訪れた。

案内された授業は1年生で、0から9までの数字のついたプレートが教師が1枚手に取ったあと皆に声を出させ、次に指名した子



図1：基礎学校一年生の授業 a



図2：基礎学校一年生の授業 b

に小さなチップをその数だけ並べさせるというものだった。同じ方法で数人に聞いた後、数字が印刷された紙を皆に配り、子どもたちが好きなようにクレヨンで塗るという内容だった。学習内容からすると日本では幼稚園レベルに思えたが、約20名のクラスに移民らしき子が多数おり、年齢も揃ってないように見えたことから授業運営に苦労があるのではと推測した。授業後の校長の話しでは上級学校へは学力のみで決定するとのことで、ドイツの社会構造が急変するなか従来の複線型学校制度、とりわけ義務教育期間の教育の有り様が問われていると言ってよい。ドイツは2000年のPISAで参加32カ国中20～21位となり、PISAショックと言われる衝撃が走ったが、すぐに教育改革が打ち出され少しずつ盛り返したものの、2012年の「読解」は依然20位と低迷している。またOECDが同年発表した調査報告で、ドイツへの移民は40万人に上り、私たちの訪問時ではさらに増えていたと思われる。そういった状況のなか、ノンバーバルコミュニケーションである描画（美術）は教科横断的ツールとしても一定の役割を果たしていると思った。

*

翌日訪問したシュタイナー学校（Rudolf Steiner Schule Düsseldorf）は、広い敷地にユニークな形をした木造建築がいくつも建っていた。最初に1年生のクラスに入ったところ、板の間に低い机が並び、厚めの座布団に32名の子どもたちが大人しく座っていた。フォルメン線描の最初の頃で、呼ばれた子が黒板に長くまっすぐの線を引いていた。身なりから多くが裕福な家庭の子（1）のようで移民らしき子はいなかった。進展が緩慢なため子どもたちがざわざわすると教師が頭上に手を合わせ、それを児童がまねて集中をはかるといふ具合だった。観音開きの黒板に描かれた絵や、明るくウッディーな教室は魅力的だった。

シュタイナー学校は8年の持ち上がりで聞くが教師と相性の悪い児童はいないのだろうか、奇しくもその場面に遭遇した。4年生の音楽で、開始前から男性教師が授業に集中させることを強調していた。案の定、授業開始後おしゃべりしている子がいたため教師が何度も注意し、そのうちある女子に



図3：デュッセルドルフ・シュタイナー施設



図4：シュタイナー学校、一年生の授業



図5：シュタイナー学校、オイリュトミーの授業

教室から出ていけと命じた。私が注意力散漫に見えたのは他の男子だったが、命ぜられた子は憤然として出て行ってしまった。今時、日本の学校では見られないような制裁で、どうみてもやり過ぎである。その子と教師の今後の関係が気になると同時に、シュタイナー学校では教師の力量形成の場があるのか気になった。

シュタイナー学校の名誉のために他の授業を紹介すると、オイリュトミーは素晴らしかった。教室は別の建物の多目的室で行なわれた。ピアノの伴奏に合わせ、約20名の高校生が図形をトレースするように動くのだが、それは体操というより踊りに近く、伴奏曲の抑揚に合わせ強弱をつけたりして感情を表していた。何度も練習しているようで黒板には様々な図形が描かれていた。教師はベテランの日本人女性で、シュタイナー学校に興味があって来たところ、すっかり取り憑かれたとのことだった。淡々と教えていても生徒たちがリスペクトしていることがわかり、一斉にリズムカルに動く姿はとて躍動的で感動した。

*

ホールで高校生の演劇を見た後、校内の食堂で連絡役の女性教師と話す機会をもった。学校は教師全員が参加する民主的な運営で、校長を置かない体制とのこと。しかし長時間待たされ、予約内容も変更されるなど管理体制にはいささか気になった。広い校内には農園もあるようで採取された野菜が販売され、陶芸工房もあるようだった。また売店では文具や教材にまぎって子どもの親が製作した布製のカバーなどが置いてあるなど家族的な雰囲気が漂っていた。

シュタイナー学校は芸術を重視し、あらゆる芸術的刺激で子どもの総体に語りかけ、授業での芸術的構成を基本に多彩に展開しているということであるが、実際に訪問してみて美術教育の理想を実践している場であると感じた。

(立教大学名誉教授)

(1：ドイツでは教育費は大学まで無料であるが、私立のシュタイナー学校は有料で、障害をもつ子どもは無料であるという。保護者は振興団体に所得や資産の自己評価による寄付をし、それが学校への補助金になるというシステムと聞く。)

ソウル特別市中堅教員にみる図工科授業の 構想力と驚き

鈴木幹雄

1、校長室にて、権（クオン）五勲校長先生 との再会

この度、安東恭一朗国際交流委員会前委員長が研究代表者を務める共同科研の一環で、韓国ソウル市浦二初等学校（小学校）を訪ねた（2016.3.15,17）。同校は、権（クオン）五勲校長



図1：韓国ソウル市浦二初等学校校長、権 五勲先生

先生が校長を務めている小学校で、ソウル文教地区近くに位置する。権 五勲校長先生は、かつて兵庫教育大学に留学し、学校教育学を学んだ日本留学組の先生（図1）。

筆者が2012年、5月にソウル特別市の表現教育を調査・研究した際には、かつてソウル河南教育長をされておられた奇清（キッチョム）先生の推薦学校案内を支援、韓国語・日本語通訳のご貢献を戴いた。当時、新大林小学校教頭先生をしておられた。

今回は、2016年3月17日に同小学校を訪問後、権先生推薦の図画工作の担当をされている、イム・ジョンファ（林正和）先生に授業を特別に依頼してもらえた。2日前に依頼をうけたイム先生が見せてくれた小学校4年生の図画工作の授業は、わずか2時間続き1コマの授業であった。にもかかわらず、授業の構築力に驚嘆する内容であったので、以下ではその一端を簡潔に報告したい。

2、イム先生の授業：私の「記憶の中の家の様子」を表現する」

授業の骨格と流れについて：

①第1局面：「住居」についての子どもたちへの問いかけと導入

まず先生は、生徒たちに「私の考える家の様子」を白画用紙とはさみで「表現」させた。子どもたちは、自分の思いつく家の「形」を切り出した。同作業後、順次黒板上の栗色の大きい画用紙の上に貼って、紙面を一杯にした（図2）。

②第2局面：先生の子どもたちへの「揺さぶり」：

次に先生は、子どもたちが「住みたい家の様子」をイメージさせた。そして同時に、最初は世界の奇想天外で「魅力的な住居」を大型液晶ディスプレイを使って子どもたちに見せた（図3）。そしてその後には、外国の静かな住居を（図4）。子どもたちは、一同、その魅力と構想に驚嘆した。そして各々様々な感想を口々に語った。



図2：生徒たちが最初に考えた「私の家」



図3：先生が見せた世界の奇想天外で「魅力的な住居」



図4：先生が見せた世界の「魅力的な住居」

③第3局面:「住まい」についての子どもたちの夢・内面的なイメージの広がり模索:

第2局面を経て、先生は子どもたちに、「住まい」の中にある様々なものと「住まい」への様々な夢を「象徴化」させる方法で、想像させた。そしてそれを白画用紙とはさみで「表現」させた。紺青の大きな画用紙の上には、ベット、樹木、玄関、ふとん等々が貼られた(図5)。

ここで先生は、子どもたちの理解とイメージを、「住居の形」から「魅力的な住居」へ、「魅力的な住居」から「住まい」についての夢と内面化されたイメージへ発展させようとした。

先生の子どもたちへの課題設定: <心の目で「住まい」のイメージをつくりなさい>

並行して、先生は子どもたちに「第2の揺さぶり質問」を投げかけた。「もの」としての椅子や、机や、家に対して「私の家」というイメージへの広がりへ、と。子どもたちは、各々の生活経験や生活上の「思い」から、様々な夢を形にした。いわば、心の目で把握した「住まい」のイメージを、紙とはさみで造形化した。

生徒達は自分の作品を制作した後、黒板上の黒い画用紙の上に貼付けた。それらは造形性としてはたわいのないものであったが、あえて造形性だけを主要ゴールとしないことによって、画用紙上には、子どもたちの色々なイメージが溢れていった。ハート、ベット、果物、等々という風に(図6)。

④第4局面: 絵文字(ピクトグラム)と標識デザインを学ぶ

実はそれらは、子どもたちが心の目で把握した「住まい」のイメージであり、一人一人の子どもが切り出した「絵文字」の造形化であった。

先生は授業の最後に、生徒達に韓国の障害者保護の絵文字(ピクトグラム)標識を大型液晶ディスプレイを使って見せた(写真は取れなかった為、右掲示の写真は、韓国の「老人保護」と「子ども保護」の絵文字標識(図7))。そして生徒の関心を「ピクトグラム」の道路標識の発見へ繋げた。



図5: 生徒が切り出した、「住まい」の中にある様々なもの



図6: 生徒が切り出した、「住まい」の中にある様々なもの



図7: 韓国の「子ども保護」と「老人保護」の絵文字標識(ピクトグラム)

3、校長室にて先生方への謝辞

校長室にて、権（クオン）校長先生と突然の特別授業を引き受けてくれたイム・ジョンファ先生にお礼を述べ、学校を退出した。隣国の首都、ソウル特別市で、中堅教員に表現教育の授業構築力・構想力が育って来ている現実に感心した1日であった。キーパーソン、イム先生の授業の背後に、豊かな図画工作科の授業連鎖がいかに広がっているかについては、今後の研究課題であるが、年間を通じての授業展開力量と授業展開展望なしには、このような単元融合的な授業の構築化は不可能であると推定し、また次回の再訪を期待した。

指導的教員の授業構想力量と並んで、力量ある先生をセレクトされた校長先生の「観察眼」に感謝して、帰国前日のホテルへ向かうこととなった。先の国際交流情報では、ソウル大学附設小学校の図画工作の教師であったキム・ウー先生の実践を紹介したが、前日の3月16日には、近隣の城北小学校に転勤されたキム先生にお会いした1日後の事であった。キム先生にも、次回の韓国訪問時には授業の参観をお願いし、3月18日には釜山経由で帰国することとなった。（神戸大学 教授）

Ⅱ部：国際社会で取り込まれている芸術文化教育・鑑賞教育

ルーブル－ランスにみるフランスの芸術文化教育

結城孝雄

2012年に開館したルーブル美術館 ランス（Lens）別館は、今日的なフランスの芸術文化教育を象徴する施設であると考えます。2016年2月に訪問した時の様子からレポートします。

ランスは、パリからTGVを乗り継いで1時間あまりで到着しますが主要都市ではないので、直行便はありません。ランス周辺地域は、今日フランス国内でも所得レベルが最も低い地域です。かつて石炭鉱山で栄えた地域で、車中から「ばた山」があちこちにみえます。エネルギー転換後は、主要な産業がなく、忘れ去られた地域でした。

小さなランス駅に降り立つと、この地域特有の煉瓦の住宅店舗が静かに建ち並び、人通りもまばらです。駅からは美術館までシャトルバスが運行されていますが、遊歩道も整備されています。住宅地や幹



図1：ルーブル美術館 ランス別館のあるランス駅前

線道路に沿って、巨大なサッカースタジアムを見ながら、15分程度で丘陵に佇むルーブル・ランスに到着します。

*

日本人建築ユニット SANAA が設計したことでも話題を呼んだ建物は、工事中の外壁を思わせる艶消しのアルミで覆われています。

エントランスには、すでに団体観覧者が列をなして、セキュリティチェックの最中でした。個人の訪問より、バスを連ねた学校、年配の団体が多数来館しています。ある学校団体に話を聞くと、近郊の中学校がドイツとの姉妹交流行事で毎年この時期に訪問するということでした。また、日本でいう地域の「町内会」的な組織の年配のグループも多数来訪していました。無料でしたが入館手続きを済ませて、ロッカールームのある地下に降りると文化財の保管と修理部門がガラス越しに見学できるようになっています。その日は、ルイ王朝時代の家具の修理がされていた。文化財保存に関する情報がタッチパネルになっているガラス壁面から操作して、取り出すことができます。また、美術館に関する情報もフロアの大きなデスクにあるタッチパネルから入手できる。文化理解だけでなく、維持保存継承という視点も芸術文化教育の大きな側面として、視覚化されている。

さて、展示フロアに戻り、いよいよ作品とご対面です。展示フロアは、巨大な体育館をおもわせる一つの空間になっています。外壁のアルミが内装にもつながり、第一印象が良くないアルミ壁面でしたが、内部の作品との対比は、素晴らしいものでした。明るく落ち着いたくすんだ空間に作品が見事に引き立てられて鎮座していました。さらに印象的なことは、作品のレイアウトなのです。アルミ壁面の上部をよく見ると、年代の目盛りが刻んであります。その目盛りに合わせて、作品が世界規模で並んでいるのである。それは、人類の文化遺産を年代順に配置して、その移り変わりを一目瞭然にしていることとなります。美術館というより、「西洋文化遺産博物館」と言ってもいいかもかもしれません。人類が美しさの価値をど



図2：ルーブル美術館 ランス別館の遠景

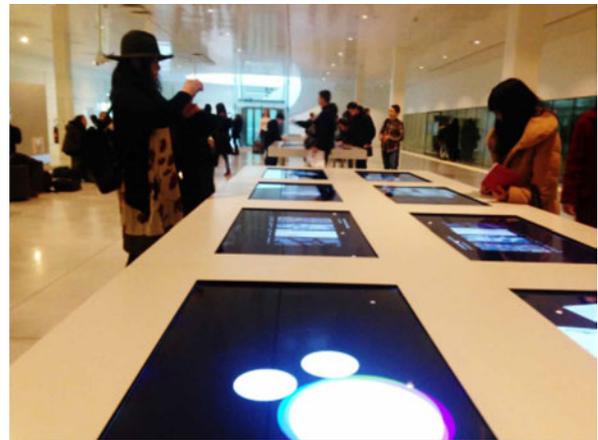


図3：ルーブル美術館 ランス別館の展示フロア



図4：ルーブル美術館 ランス別館の展示フロア

の様に表現してきたかを体現しているかの様に思えました。このレイアウトは、文化を同時代、同領域の比較検討を容易くする配置でもある。観覧者は、横に進めば同時代を比較しながら、縦に進めば同領域を、常に比べながら、価値ある遺産としての文化と美の基準を思考しながら、鑑賞できるのです。そして、最後に展示してあるのが近代フランスを代表する作品「民衆を率いる自由の女神」である。人類の文化がたどり着いたのが我がフランスであるという仕掛けでしょうか。メソポタミア文明から近代フランスまでの西洋文明の縮図を明快に展示しているのです。したがって、アジアの文化は、全く存在しません。

*

観覧している生徒たちにインタビューしてみると、授業の一環として、ワークシートに書き込みしながら、知識を増やす課題を行っていました。世界一級の文化財を目の前にした活動は羨ましい限りですが、ワークの内容は一般的な知識を問うものでした。日本でも同様に、自分達のアイデンティティーに関わる文化について、必ずしも一般的な知識を持っているとは限らないのである。さらに多文化共生社会において、家庭での文化背景が西洋文化と異なる場合、その理解は遠のき、関心すらないのです。現実に起きているテロの背景、事例を挙げれば、明白でしょう。この美術館は、西洋文化にスタンスを持つ国民が異文化を理解することと同様に、非ラテン文化を持つフランス人が西洋文化を理解する場でもあると思われます。入れ替わる常設展が中心で、企画展を行うスペースは限られています。

このようにルーブルランスは、教育的側面を多分に含んだ美術館と言えるでしょう。文化的環境から

取り残され地域に、世界一級の文化財を展示する野心的な試みは、フランスの芸術文化施策の三大原則である「機会均等」「直接参加」「領域拡大」のうち、文化的僻地の解消と地域振興を図りながら、フランス北部の芸術文化の教育機関としての役割があると考えられます。一級の美術作品は十分に鑑賞の対象になりますが、美術愛好家たちに向けられた美術館というより、一般的な国民に啓発に重きを置いた施設であると考えます。

この美術館の役割と効果がどのようなものか、今後のアセスメントに関心を持ちます。

(東京家政大学 教授)

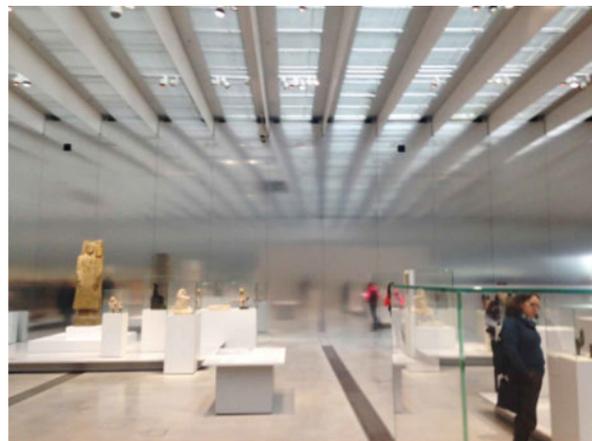


図5：ルーブル美術館 ランス別館の展示フロア



図6：ルーブル美術館 ランス別館の教育的資料

海外の美術館を利用したオンラインによる 国際授業の開発

ーフィラデルフィア美術館との連携を通してー

中村和世

インターネットの普及によって、海外の美術館等がホームページから提供する美術作品の画像や教材を用いて授業ができる時代になった。世界規模でグローバル化が急速に進む中、これからの図画工作・美術科教育を担う教師には、自国と合わせて他国のさまざまな美術文化にも目を向け、多文化的な環境に生きる子どもたちのために、多種多様な美術文化を学習材とした授業づくりの力が必要となる。

私が大学で担当しているオムニバスの大学院授業「学習方法開発特講」では、2年前から1コマの時間（90分）を使って、フィラデルフィア美術館との連携によるオンライン国際授業を行っている。目的は、①海外の美術館教育について知ること、②多種多様な美術文化に親しみ、自らの授業づくりに役立てられる国際的リソースを蓄えることである。フィラデルフィア美術館で教育普及を担当しているリンダ・オーレアリ（Lynda O'Leary）先生のご協力のもと、初年度は「ゴッホを中心とする後期印象派の絵画」、昨年度は「東洋の美術（インド、中国、日本）」をテーマにした授業を行った。授業では、国際テレビ会議システムを使用し、オーレアリ先生と対面しながら、学校向けプログラムを紹介していただいたり、美術館所蔵の作品をスクリーンに映し出してディスカッションを行ったりしている。受講生からは、「フィラデルフィアとの距離を感じないほど、臨場感があって面白かった」、「美術を通してお互いがつながれた」、「フィラデルフィア美術館の多様な教育プログラムに興味を持つことができた」、「自国（日本）の文化がアメリカでとても大事にされているのを見て、普段は気づかない自国の文化に気づくことができた」などの声を聞いている。

今後の展望として、フィラデルフィア美術館の所蔵作品を用いた題材開発を授業の中で進め、国内のみでなく海外の美術館のリソースを活用できる力のさらなる育成に努めたいと考えている。

（広島大学 准教授）



図1：フィラデルフィア美術館



図2：リンダ・オーレアリ先生



図3：2015年度の国際授業の鑑賞作品「ガネーシャ」（750年頃制作）

特集：2017年韓国 InSEA 参加・発表登録とアクセスについて

先に InSEA2017 大会の韓国実行委員会のホームページ・サイト「InSEA 2017 第35回世界美術教育大会 スピリット・美術・デジタル」が立ち上げられました。以下は、韓国人留院生張主善君、元交換留学生施多慧さんの協力・調査に基づく登録情報の報告です。参考にして頂けましたら幸いです。

なお本報告は、大学美術教育学会「国際交流情報 IRCN」のいわば「情報提供」としてご用意させていただきましたので、参考にして頂きながらも、最終的には各自の研究と判断でご確認、ご判断下さい。

英文オリジナル・ホームページは次の通りです。Cf: <<http://insea2017.org/index.php?gt=regi/regi01>>(URLは学会HPから拾い易いです。以下同。)

(1) InSEA2017 世界美術教育大会日時・開催地：

日時：2017年8月7日(月)－11日(金)

開催地：韓国テグ市

開催会場：テグ EXCO 展示および会議センター

(2) InSEA2017 世界美術教育大会関連サイト：

英文 INSEA2017 大会関連サイト：

<<http://insea2017.org/index.php?gt=regi/regi01>>

和文 InSEA2017 大会関連サイト：

<http://insea2017.org/download/Japanese_Overview&CongressTheme.pdf>

(3) テグ市 InSEA 開催の会場、及び会場への道順：

会場：テグ EXCO の展示および会議センター

会場、並びに会場への道順案内：

1) 日本語版テグ EXCO の展示および会議センター 案内：

<<http://www.sekainotomari.com/korea/exco.htm>>

2) テグ市の InSEA 開催の会場までの地図(日本語)：(個人の立ち上げた HP)

<<http://www.exco.co.kr/jap/traffic/traffic.html>>

(4) テグ市内の道順：

<<http://ameblo.jp/byonjeonju2/entry-11971939811.html>>

(5) InSEA2017 世界美術教育大会(韓国)の指定トピック[発表会場テーマ]構成：

1) 諸芸術により人間性を育む：諸芸術はいかに様々な人権と持続可能性の意識を高めるか。

2) 多様性を手に入れる：社会的関与を引き受ける芸術教育はいかに文化的多様性を推進しコミュニティを強固にするか。

3) 日常のデジタル・スペース：人間の諸経験はいかにデジタルの世界で変化してきたか。

4) 未来を構想する：芸術教育は第四の波と呼ばれる新しい時代にいかに準備するか。(以上、報告者訳)

(6) INSEA2017 世界美術教育大会(韓国)登録法：

1) 関連英文説明：[注意事項]

参加者は InSEA のメンバーである必要があります。[ただ]InSEA のメンバーでない場合には、登録時に[登録アイコンで]、「非会員 Non-member」を選んで下さい(非会員の登録者は、自動的に InSEA 参加のメンバーとして登録されます)。(同上)
<原文>

All the participants must be InSEA members. if you are not an InSEA member, please make the registration for InSEA 2017 as a Non-member (Registered participants as Non-member of InSEA World Congress 2017 (InSEA 2017) will be joined the InSEA member automatically) or join InSEA at INSEA webpage (<http://www.insea.org/insea/join-or-renew?reloaded=true>) firstly.

2) 登録金額：(各自自己確認下さい)

・一般申込：InSEA 会員：390 米ドル(標準登録) 330 米ドル(早期登録)

・一般申込：INSEA 非会員：450 米ドル(標準登録) 390 米ドル(早期登録)

・学生申込：InSEA 会員：290 米ドル(標準登録) 230 米ドル(早期登録)

・学生申込：InSEA 非会員：350 米ドル(標準登録) 290 米ドル(早期登録)

・随伴者：150 米ドル

・大会ディナー：100米ドル

3) 登録方法：オンライン登録

4) 支払い方法：クレジットカード決済

(Cf.: <<http://insea2017.org/index.php?gt=regi/regi01>>) (電信送金による支払い方法も提示されていますが、料金がかさみます。)

5) 申込の取り消し・払い戻し

5月31日以前取り消し(2017年):全額払戻し

7月15日以前取り消し(同上):50%払戻し

7月16日以後取り消し・会議に出席しない場合(同上):払戻し無し

(7) 概要提出期日等:(各自自己確認下さい)

1) 概要提出期日

a) 概要提出開始・オンライン登録開始:

2016年6月1日

b) 概要提出締め切り:2016年11月6日

c) 選考結果の通知:2017年2月28日

d) 早期登録者(発表者)の締め切り:2017年5月31日

e) 早期登録者(一般登録者)の締め切り:

2017年6月30日

2) 概要提出の注意事項:

a) 発表者は皆、公的ウェブサイトを通じて発表概要を提出しなければならない。

b) 発表者は誰もが、一人につき二つの概要を提出することができる。

c) 発表者は皆発表概要を提出する前に登録と登録金額支払いを済ませなければならない。(同上)

(8) 申請「発表概要」書式:(自己確認下さい)

1) 詳細は、<Call for Abstracts>ページのTemplate(参考用書式)を参照のこと。

2) 文書:A4、縦、1頁以内。

3) 文書余白:上:30mm、下:25.4mm、左:25.4mm、右:25.4mm。

4) 発表概要原稿 表題:Times New Roman, 14ポイント、Bold(センタリング)。

5) 発表者氏名:Times New Roman, 12ポイント(センタリング、複数の場合は、主発表者に下線、それぞれに上内数字を付け、氏名の下に注として付記する(センタリング))。

6) 発表者所属:(複数の場合は)注番号を付け、(それぞれに)所属を記載する(センタリング)。

7) メール・アドレス:発表者所属の下に連絡者のメール・アドレスを記載。

8) 概要本文:Times New Roman, 12ポイント、以上全てを1頁以内に納める。段落冒頭、文字あけなし。(同上)

(9) INSEA2017 世界大会、口頭発表・質疑応答の原語:国際語(英語、フランス語)(報告:鈴木)

[編集後記]

今回の『国際交流情報 IRCN13号』では、トピックを2点特集しました。「国際社会で取り組まれている美術・図工科教育」と「2017年韓国 InSEA 参加・発表登録とアクセスについて」です。

前回第12号では国際交流委員会以外の方々に原稿執筆を依頼しましたので、本号では2点を委員会委員外の先生方に原稿執筆をお願いし(小澤基弘先生のアメリカ図工教育の取り組み調査報告、富安敬二先生のドイツの教育事情の調査報告)、4点を国際交流委員会委員の先生方に執筆をお願いしました(甲田小知代先生のフィンランドの美術教育調査報告、結城孝雄先生のフランス芸術文化教育調査報告、中村和世先生のアメリカにおけるオンライン美術館との連携調査報告、鈴木 韓国のソウル市図工科授業調査報告)。(なお「目次の紹介原稿」に関しては、執筆者の了解を得ています(手段:内覧用PDFによる確認)。)

12号では、「グローバル化が進む中で伝統的なことをどのように教えているか」を浮かび上がらせましたので、2015年9月委員会方針を踏まえて、今号では視角を変える事としました。多面的に表現教育の立ち位置・使命を浮かび上がらせることにより、いくらかなりとも複眼的視点と複眼的発想を涵養できればと期待しました。

制作者の先生も含め、調査経験のある先生方に本「通信」原稿執筆のご協力をお願いします。

同時にまた、2017年のInSEA参加を構想下さい。英語が要りますが、個人参加・申込も可能です。

(編集:鈴木幹雄)

大学美術教育学会
国際交流委員会
国際交流情報誌

2016
IRCN

発行：増田金吾・
小野康男

[理事長：東京学芸大学
／横浜国立大学]

委員長(代理)：鈴木幹雄
編集：同上

2016
IRCN
Vol.13

2016 年秋季号

IRCN第13号

2016年9月24日発行

発行：大学美術教育学会 国際交流委員会

理事長 東京学芸大学 増田金吾／
新理事長 横浜国立大学 小野康男
委員長(代理)：鈴木幹雄 編集：同左